

勝手に不利益認定

京都先端科学大学

川上 浩司

不便だからこそその益がある、という話をしていきます。そのような益を「不利益」と呼びます。先月号では、四半世紀の間に私が「勝手に不利益認定」した事例がたくさんあり、いつか紹介したいと書きました。早速ですが、今月号で紹介します。

不利益とはどのようなものを説明するのに、不利益の事例を使うのが便利です。最初は「なんのことやら」という顔をされている人でも、いくつかの事例を

お話しするとすぐに、自分でもアルアルの様子になり、自分の不利益体験を話し出されます。ただ、その時に私が使う事例は、図らずも不便から益が得られた体験を、後付け的に私が不利益であると説明しているだけの場合が多いのが悩みです。そういう場合、話を聞いた人からは、「究極のポジティブシンキングですねえ」とか「そうそう、昔の暮らしは良かったねえ、懐かしいなあ」という感想が返ってきます。これは、後付けの説明だからしょうがないのかも知れません。

そうではない、と説明するには、後付けでは力不足です。逆に、先付けでも言いましょうか、あえて意図的にデザイン段階から不便を導入している事例が必要です。そして、そのような事例を見つけては私が勝手に不利益認定しています。私たちが不利益という固有名詞を作り出す前からある事例、あるいは不利益という言葉とは関わりのないところで作り出された事例を、「これって不利益」と認定しているわけで、他人の禪で相撲をとっている感がありますが、ご容赦願います。

勝手に不利益認定その一は、バリアフリーです。バリアフリーはよく聞く言葉で、バリア（障壁）をフリー（無し）にする考えです。これとは逆に、軽微なバリアをあえて設え、フリー（有り）

にする考えが、山口県にあるデイケアセンターから始まりました。普通に考えると、バリアフリーの方が便利です。日々の生活に障壁がない方が楽ですし、足腰の弱くなった人でも生活できる範囲が広がり、危険な目に遭うことも少ないでしょう。ところが、動物の体は怠け者です。使わなくても済む能力は、次第に失われてゆきます。常にバリアフリーのところで生活すると、自分の体が鈍ってしまわないか、心配になります。

バリアフリーにすると、日々の生活が身体能力低下のスピードを緩やかにするプチ訓練になるわけなので、このデイケアセンターは人気が高いそうです。それならば、もっと多くの施設でバリアフリーを導入すれば良いのにと思うのですが、そもそもの理由があります。折

角バリアアリーにしているのに、スタッフが入居者を常にサポートしては意味がない、これ以上は危ないという所を見切って初めて手を差し伸べるスキルが必要で、そのようなスタッフを育てるのは簡単ではない、とのこと。

勝手に不利益認定その二は、足漕ぎ車椅子、その名もCOGYです。車椅子に自転車のペダルのような部品がついており、ペダルを漕ぐと車椅子が前進します。左右に曲がるハンドルも装備されています。はじめて聞いた時は、なんじゃそりゃと思いました。車椅子とは足の不自由な人のためのものはずなのに、足で漕げとはどういうことかと。でも、説明を聞いて納得しました。車椅子のユーザーには片足だけ不自由な人や、力が弱まってバランスがとれないだけの人がい

勝手に不利益認定その三は、でこぼこ園庭です。全国には、園庭をでこぼこにして園児たちをこけさせようと画策する園長先生が、そこそこいらっしやるようです。不利益事例を集め始めた四半世紀前、新聞記事ででこぼこ園庭のことを読みました。その時は「ふーん、不便なのに、なんでだろうね」ぐらいの感想でしばらく忘れていたのですが、ある時にふと思い出し、ウェブ検索してみると、でこぼこ園庭が日本中で増殖していました。これはきつと不利益があるのだろうと調べてみると、「でこぼこにしたら園児たちがイキイキした」とのことです。

普通に考えると、でこぼこの方が平らな方より、移動には不便ですが、そこで走り回ることによって園児たちの体幹が鍛えられるという益が期待できそうです。

ます。そのようなユーザーにとっては、自分の力を使う必要のない便利な電動式よりも、自分の足で移動している事実のほうが、うれしいのです。

足漕ぎ式は、場合によっては足の訓練にもなるでしょうし、足の力が衰えるスピードを緩めてくれるかも知れません。COGYには、オプションでペダルにソケットを着けることができます。このソケットに足先を突っ込むと、動く方の足でペダルを漕げば動かない方の足もつられて動きます。これは、リハビリにもなると聞いたことがあります。特別な場所と時間にリハビリするよりも、できれば日々の暮らしが自分の能力を回復する方向に向かわせてくれる方が、嬉しい気がします。

たしかにそういう側面もあるでしょう。しかし不利益として注目したいのは、園児がイキイキするという益です。なぜだろうと考えてみると、自分にも思い当たることがありました。子どもの頃、平らに整地された学校のグラウンドや広場で放課後に遊ぶこともありましたが、野山に入り込んで遊ぶ方が楽しかったことを思い出しました。今の都会には入り込める野山もないでしょうから、でこぼこ園庭は擬似的に野山の代わりになってくれているのでしょうか。

川上浩司（かわかみひろし）

一九六四年生まれ。京都大学工学部、同工学研究科修了。京都大学助教授・特定教授などを経て京都先端科学大学工学部教授。不利益の研究で学会論文賞、出版賞多数。著書に『不利益という発想』（二〇一七）など多数。